

もう泣かなくとも良い

死は、ひとの営みの中に組み込まれています。誕生があれば死があり、創造があれば終末がある。太陽や星のように、人間の寿命に比べればはるかに長いスパンをもつ物体であれ、終わりは必ずくる、神さまに造られたこの世界にある被造物は有限であるというのが、聖書がその最初に伝えることです。わたしたちも勿論、死なない人間がいるなどと聞いたら、そんなバカな、人はみな死ぬものだと言えぬでしょう。太陽が必ず東から昇るように、人は死ぬというのは動かしようのない事実であり、誰にとっても想定内であるのは間違いありません。しかしながら、この想定内の事実が、ことわたしの友人であったり、親戚であったり、はたまた家族と自分に近づいてくるにつれて難易度があがり、ついに事柄が自分の死ということになると想定外となってしまうのは何故なのでしょう。戦場に出ても皆、鉄砲の玉は自分を避けて通るくらいの感覚で、真逆、当たるなどとは考えもしないと聞いたことがあります。かくいうわたしも自分の父親がある日、膵臓がんで手遅れだと分かったときには、こういう出来事はテレビドラマでは起きるだろうが、まさか自分の家で起きるとは思ってもみなかったというのが正直な感想でした。26歳のときです。それから沢山の死を体験してきました。牧師として召されてからは特に癌を告知されて召されていく人や、突如、召された方、そしてその家族の方々の嘆きや悲しみを間近で共有する機会を重ねています。わたしが教会員にリビングウィルを勧め始めて20年近くになりますが、このリビングウィルには「メメント・モリ」という言葉を必ずそえています。「汝、死すべき存在であることを記憶せよ」、この真実を心に刻み、一度限りの二度と繰り返すことの出来ない

神さまから貸し与えられた命を生きることには真剣でありたい。毎年、教会暦の最後の主日、収穫感謝日を、本来の意味である魂の刈り入れの日として捉え直し、死がわたしたちの営みの延長線上にあることを毎年、確認すること、死を想定外のこととするのではなく、よく見つめて、キリストの十字架と復活に望みを置いて生きる者となることを願ってのことです。

さて、ここまでは今日の聖書箇所になんだ前フリのようなものですが、週報に書きましたように書簡をふたつ読み終えたので、これからしばらくルカによる福音書ならではの記事を取り上げて御言葉に聴いてゆきます。最初のルカの特記記事は、「ナインのやもめ」でした。ちょうど今日で川口美智子姉が召されて1ヶ月、翌週には松下暁子姉も召されましたし、タイムリーな御言葉が与えられたと言ってよいかもしれません。

この出来事のスケッチはたんたんとなされており、そのなかで、イエスさまの激情ともいべき感情のほとばしりが目をひきます。それはいつも、どこでも見られる野辺の送りの光景でした。イエス様と弟子たち、そして群衆が、ナインと呼ばれる町に入ろうとしたところ、町の門からやって来る葬儀の列と鉢合わせをした。ちょうど棺が担ぎ出されて墓に向かう途中だった。棺と書かれています。正確には棺桶というより、担架で遺体を運んでいました。福音書には音の描写はありませんが、一人息子を喪って、嘆く寡婦の母と、悲しみを共有して泣いている人たちの嗚咽や、呻き、ささやき、時には号泣の声もしたのであろう悲しみの列が主イエスの方に向かって進んできたのでした。寡婦というのは夫を亡くした婦人のことで、さらに頼りにしていたであろう一人息子まで亡くしてしまい、その葬儀が行われている。子どもが先になくなるのは逆縁の不幸というそうです。また子どもを亡くすことは未来を失うこと、兄弟を亡

くすことは今を無くすこと、親を失うことは過去を失うことと言います。いずれにせよ、愛する存在を亡くすことは人間最大のストレスです。さきほど死を想定内・想定外という枠組みで紹介をしましたが、頭では分かっている、気持ちの部分、感情の部分、心の部分で簡単に納得の行くことではありません。もぎとられるような痛みや、悲しみを覚えるのは、各人のかけがえのない人格と、それに接することによって与えられてきた交わりの喜び、もちろん中にはそう単純には言い切れないものもありますが、そうしたことも含めて、わたしたちの感情が大きく動く非日常の体験であることは間違いありません。だからこそ、死別の悲しみと衝撃に対応するために共同体の援助と配慮が欠かせないのです。ともに嘆き、泣くことを通して、その人の悲しみに参与し、共感し、喪失の痛みを和らげる働きをする。泣くこと、涙を流すことは、大きな悲しみに出会った時の身体の自衛的な反応だとも言われていますから、むしろ泣くこと、嘆くことが必要ですらある。それによってなにがしかストレスを発散できるからです。そういう喪の過程といいますか、嘆きのなかにある野辺の送りの群れに目を留められ、その中心にいる寡婦にむかって、主イエスは激しく心を動かされた。13節「主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われたとあります。この7章13節は極めて重要な箇所です。皆さんが学生なら、テストに出ますから線を引いてください、と言いたいくらいです。まず第一に、福音書記者ルカが人物の発言のなかで、イエスに向かって「主よ」という呼びかけを記すことはありましたが、福音書記者ルカとして、初めてここでイエスに対して「主は」という称号を使っています。これは事柄が癒やしのレベルを超えて、死者を蘇らせるという大きな恐れを引き起こす出来事でしたから「主」という称号がここで使

われたと見て良いでしょう。さらに「もう泣かなくともよい」という主イエス・キリストの発言の前にある「憐れに思い」が重要です。有名な「スプランクニゾマイ」という動詞が使っている。「スプランコン」とは「内臓」で、その動詞形が意味するところは「はらわたが揺さぶられる」という激しい憐れみ、相手に向かって気持ちが腹の底から動く、断腸の思いと訳す人もいる。そして、新約聖書ではこの「憐れに思い」と訳された「スプランクニゾマイ」は神さまとイエスさまにしか使われません。今日の箇所との関連でいうならば「イエスは、群衆が飼う者のいない羊のように弱り果てているのを見て、深く憐れまれた」という箇所に、この「はらわたが震える」という動詞が使っている。主イエスは野辺の送りの真ん中で担架に付き添い、泣いている母親を見たとき、まさにそのように激しく気持ちが揺さぶられた。そして、「もう泣かなくともよい」と言われたのです。これはどういう意味でしょうか。わたしたちも、もう泣かないで、と口にすることは出来るでしょう。この場合、そんなに泣いたって死んだ人は帰ってこないよ、であったり、そんなに泣いても無駄だよ、身体に毒だよ、ついには、いつまで泣いているんだという、どうにもならない現実に向かい合おうとしない苛立ちをあらわすような場合だってあるかもしれません。しかし、イエスさまの発言は違います。この御方が「もう泣かなくともよい」と言われるとき、その意味は、ここにわたしがいるから、であり、わたしが何とかするから、という行動を起こされるが故に、あなたはもう泣く必要がない。事柄はあなたの手を離れて、わたしの手に移されるのだからという意味です。そして実際に近づいて棺に手をふれて担いでいる人たちを止めると、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と命じ、彼を起こして、母親にお返しになった。この出来事を見ますと、「もう泣

かなくともよい」というイエスさまのお言葉は、根本的に死に敗北してしまっているわたしたちの状況に対する腸がふるえるほどの憤り、創造主を認識できないゆえに、地上の孤児のように思い、頼るべき存在を喪ってしまったと嘆く母親への憐れみから発せられ、ここにわたしがいるという、死に勝利される救い主の姿を指し示している。そのお姿に対して福音書記者も畏れをもって「主」という称号を用いた。死はいつでもどこでもわたしたちの急所です。わたしたちが身近な者の死を体験するとき、死は鋭くわたしたちを刺し貫きます。もうあの声を聞くことはない。もう同じ時間のなかを歩むことはできない。そして亡骸は彼らの暮らしていた町から出て墓地へ向かう。だれも逃れることのない道行きです。墓地は町外れの道沿いにあることが多かったのでそこへ向かって野辺のお送りがはじまる。しかし、まさにその場へ、外から、キリストが歩いて来られる。嘆くわたしたちのところへ。悲しみに我を忘れ、涙を流すことしかできないわたしたちの所へ。来てくださっている。わたしたちが葬儀のたびに確認したいのはまさにここです。死を免れることは誰も出来ない。主イエスでさえ肉体を持たれたがゆえにその運命から逃れることはありませんでした。しかし、主は復活された。ご自分の肉体において死を体験し、陰府に下り、三日目に復活を遂げられた。死に勝利されるために肉体をまわれ、飢えや乾き、肉体の苦痛をへて死に引き渡された。わたしたちが味わう死の過程を十字架という刑罰のかたちで過酷に味あわれた。しかし、この方において十字架の死は終わりではなく、新しい命に生き始めるための目的であり、救いの成就であったことを聖書は証しています。それゆえのキリストなのです。主の慈しみと憐れみは尽きることなく、死の前に立ちすくむわたしたちに注がれていることを葬儀のたびにわたしたちは

確認しなければなりません。死を免れることは誰も出来ない。しかし、それは陰府に打ち捨てられるのではない。孤独でもない。なぜならキリスト・イエスが来てくださり、ご自身で死の問題を担って下さるからです。もう泣かなくとも良いという、キリスト・イエスの発言は、嘆きと悲しみのただ中にあるわたしたちのまさしく中心に、主が臨んでおられる、激しく気持ちを動かしておられるという神の出来事に目を向けるよう促します。わたしがここにいる。安心しなさい。わたしが眠っている者に呼びかけよう。彼らは起きる。この中心的な救いの出来事、約束の出来事を望み見るように促し続けるのです。

死に打たれるとき、わたしたちは茫然自失し、嘆き、他のものが見えなくなる。死の力の前に降参し、諦め、神などいないとすら思う。しかし、そうではない。聖書はそうは語っていない。悲しみに襲われ、死の力に組み伏せられてしまいそうな時にこそ、すべてのものは神から出て、神によって保たれ、神に向かっているという、このわたしたちがふだん忘れていた中心を、死の現実のなかにあって確認することがわたしたちの葬儀の目的であり、慰めであることを、キリストの立ち会われたナインの町の葬儀の出来事から聴き取りたいと願います。

お祈りいたします。